



## 目に輝きのある雄勝っ子

雄勝小学校

今回は、雄勝小学校を紹介します。

雄勝小学校は、雄勝地区のほぼ中央にあり、雄勝湾の西側に位置しています。校舎の北側には山々が連なり、特に硯上山が高々とそびえ立っています。

明治6（1873）年5月2日に第七小学区第二中学区八十小学区雄勝小学校として開校し、平成14年度には、水浜小学校と統合し、現在の雄勝小学校となっています。平成15年度には、開校130周年を迎え、歴史と伝統を誇る学校でもあります。現在は、125人の児童が、草花に包まれた学び舎で運動や勉強に励んでいます。

今年度の学校経営のローガンとして、『目に輝きのある雄勝っ子』を掲げ、「思いやりのある子ども・学習に進んで取り組む子ども・たくましい子ども」の三つの目指す子ども像の実現に向け努力してまいります。

雄勝小学校の特色ある教育活動としては、生活科・総合的な学習の時間におけるふるさと学習です。地域の自然や文化、伝統産業を教材化し、体験活動とおして課題の解決に取り組んでいます。

「大原川自然探検」大原川と森のつながりでは、四季折々の生き物調べをしたり、飲み水や豊かな海の源でもある清

らかな水と森林のかかわりを学んだりしています。

また、「水浜のホタテ養殖を探れ」では、豊かな海や自然条件を生かしたホタテ養殖を外部講師の協力のもと養殖体験をしながら学んでいます。

この他にも、図書ボランティアによる読み聞かせや朝読書など、『目に輝きのある雄勝っ子』の実現を目指して、学校・家庭・地域が一体となって取り組んでいます。



ホタテの耳吊り作業

## にぎやか家族 19

渡波



（写真後ろから）

《将来の夢》

熊川 亜希さん（8歳）	保育士・学校の先生
侑希ちゃん（1歳11カ月）	アンパンマン
美希さん（9歳）	保育士

お母さんから

仲間を大切にできる人になってください。人に優しい心を向けることができる人は、人から優しさを分けてもらえるから、きっと笑顔で幸せになれることでしょう……。

### 今月の表紙から

昔からの食の知恵として「お酒を飲んだらシジミ汁」「土用の丑の日にはウナギとシジミ汁」とよくいわれています。シジミは栄養価が高く、中でも良質のタンパク質やアミノ酸が多く含まれています。

河北、北上地区では6月1日の解禁からシジミ漁が最盛期を迎え、大須地区の石山潔さんも解禁日から漁を始めています。この地区で採れるシジミは、北上川の淡水と海水が混じり合う汽水域で採れる栄養たっぷりのシジミです。

金属製のかごを沈め、ロープで20分ほど引っ張ります。かごを揚げると、

一見木の枝や小石だけが採れたようですが、下のほうにはシジミが入っていました。今年も、雨が少ないので、あまり漁は良くないとのことでしたが、取材した日は、一往復の間に約3キログラムものシジミが採れました。



石山 潔さん

# サークル間 仲なかま

②1

## 伝統民俗芸能の伝承

### 河南民俗芸能文化保存協会

今月は、石巻市無形民俗文化財の5団体で結成された、河南民俗芸能文化保存協会を紹介します。



河南民俗芸能文化保存協会は、旧河南町が昭和58年に文部省から「ふるさと運動」の指定を受けたことから、町内で活動していた神楽団などが、河南鹿嶋ばやし保存会、須江獅子舞保存会、大沢南部神楽保存会、和刈法印神楽保存会、鹿又法印神楽保存会として新たに設立され、その保存会の集合体として結成されました。

会員数は地域住民と一体となつて活動している保存会もあるため、確かな人数は把握できませんが、5団体で250人は下りません。

加盟の5団体は、平成11年度に「河南町無形民俗文化財」として指定されています。また、かなん文化まつり

などでは、

伝承活動の成果を発表し、市民のみなさんに喜ばれています。

保存協

会の楽しみの一つ

に移動研修会があります。太鼓や面の製作場所を見学したあこの宿では、情報交換や懇親会が催されます。歌あり踊りあり、他のお客さんを巻き込んだの懇親会は、楽しいひとときです。

今年9月2日(日)に、石巻桃生牡鹿神楽大会が、遊楽館を会場に開催されます。民俗芸能の保存・継承のみならず、神楽を通じて、他地域の方々と親睦を深め、地域の発展に貢献したいと考えています。

鈴木貞男会長は、「団結心が強く楽しい会員がそろい、本当に良い団体と自負しています。」と話していました。



## 結婚68年目を迎える

### 坂下さんご夫婦

坂下 修さん  
キンさん ご夫妻 河北尾の崎地区

気分が良いと歌をうたい、うれしい事があると自然と手足が動く。坂下さんご夫婦には、いつも笑顔があふれています。結婚68年目になるご夫婦には、現在子ども・孫・ひ孫が26人います。修さんは5月で92歳を迎えられ、キンさんは9月で90歳になります。

同じ地区生まれだったお二人ですが、キンさんは結婚前、東京で暮らしていたため、都会生活の慣れがあり、薪でご飯を炊いたり、農作業をしたりの田舎暮らしが、あまり得意ではありませんでした。しかし、修さんはキンさんを怒ることもなく、支えてくれたので頑張ることができたそうです。

修さんは、82歳まで牛を飼っており、朝と晩2回離れた牛舎まで、毎日自転車を通い、世話をしていました。そのためか、昔は病気がちでしたが、今は薬を飲むこともなく健康です。また、キンさんが裁縫をするとき、針に糸を通してあげるほど目も見えます。

キンさんは孫が小さいとき、鳴子の湯治場に行き、そこでゲートボールの練習を孫達と一緒にするのが、毎年の楽しみだったそうです。

また、キンさんにとって忘れられない思い出は、修さんが床屋に行ったとき、

キンさんに白髪染めを買ってきてくれたことでした。初めてのお土産であまりのうれしさに、その白髪染めは使わずとっておいたそうです。

「何でもおいしく食べることができません。孫娘が色々なものを買って来てくれます。子ども達が遊びに来てくれるのが楽しみです」と笑顔を見合わす坂下さんご夫婦です。

6月3日は地区の春祭りでした。修さんがキンさんに「綿あめ買いに行くべしネ」と話したとか。

初夏の陽ざしのように暖かく、ほのぼのとした気分させる坂下さんご夫婦です。

